

セッション「社会的な制度としてのフィランソロピーの検討」

The potential of philanthropy: the social system in British history

提案者；岡村東洋光(九産大)

本セッションの課題は、「社会的な制度」として経済に埋め込まれている「フィランソロピー」の具体相をイギリス近代史において検討することを通して、現代日本における自発的な生活援助活動のあり方を考える参照系を提示することにある。

福祉国家の行き詰りを打破すべく「再」登場した市場資本主義は、リーマン・ショックを契機に破綻した。その結果、各国政府の対応は、銀行や企業の直接的な救済という形で「国家」資本主義をもたらした。そして、オバマ政権の登場や民主党の圧勝が、わたしたちにとって望ましい「国民への手厚い福祉」をもたらすかどうか、不透明な状況にある。そもそも、これから先の社会を展望するとき、目指すは旧タイプの福祉国家への回帰や、市場(金融)資本主義の再生ではないであろう。取って代わるべきは、福祉の複合体(政府・企業・地域・家族・個人)に裏付けられた多元的福祉社会であると考え。言い換えると、政府主導か、市場の自律性の回復か、という二元論的な思考枠組ではなく、政府・企業・地域・家族・個人といった主体の活動を含む「共進化」を考えるべきであろう。

フィランソロピーに関して、最近、英国は金澤周作『チャリティとイギリス近代』(2008)、ドイツは川越修・辻英史編『社会国家を生きる』(2008)、フランスは田中拓道『貧困と共和国』(2006)といった、注目すべき研究が登場した。金澤が言うように、英国では、近代社会は民間主導で形成されてきたのであり、その中心には「民間非営利の自発的な弱者救済行為」であるフィランソロピーが存在した。変化と競争が生み出す社会問題に対し、フィランソロピーは「物理的にも理念的・イデオロギー的にも不可欠の安定材料」として社会の中に制度化されて機能してきたのである。

だが、これまでフィランソロピーは、社会政策・保障の縦割りの個別領域研究への補足として取り上げられることがほとんどであった。しかも、概念自体が各国においてどのように使われ、あるいは使われず、他の用語で語られてきたのかといった初歩的な問題が残されたままである。学史学会においても、社会政策思想や社会保障や社会福祉思想との関連で、個別的に論じられることはあったが、正面から、フィランソロピーを取り上げたことは、おそらくなかったと思われる。だが、フィランソロピーは、われわれが21世紀において未来社会を(複合的な)福祉社会として構想する際には、無視できない領域である。

そこで、今回は、イギリスの19世紀から20世紀初頭を中心に、フィランソロピーを研究してきたメンバーを中心にセッションを考えた。報告者は金澤周作(京都大)「伝統的チャリティ」、岡村東洋光(九産大)「実業家のフィランソロピー」、山本卓(新潟県立大)「COS」、である。